

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

● コロナを克服するための課題

先が見えない新型コロナウイルス感染症の世界的拡大の先が、かすかに見え始めた。

世界や私の生活や生き方を大きく変えてしまい、元に戻れそうもない。

テレワークが一般化し、週休2日制のもと月曜から金曜まで出勤し働いていた生活パターンが変わろうとしている。

1週間に1日か2日出勤し、あとは家か別荘かどこかでテレワークする生活が大企業を中心に一般化している。

住宅とオフィス、或いは職場という生活空間が大転換し、都市構造が徐々に変わり始めている。

私は、住宅や住宅地、様々な働く場や建築を計画・設計し、或いはリニューアルしてきた。

高度経済成長末期からバブル崩壊の時に、既存ストックをメンテナンスする仕事を始めた。

阪神大震災と東日本大震災を経験して耐震改修を私の仕事に加えた。

今、新型コロナウイルス禍という大災害にあって、私はこれから何をなすべきであろうか？

外国との往來の大部分を制限した島国・日本では、東京を中心とした大都市が感染症の拡大を阻止できないのと同様に、釜石や大船渡、盛岡など三陸の岩手では、感染者がゼロの状態が永く続いた。

コロナ禍が拡大した首都圏と、これを食い止めた岩手は対照的で、コロナは、まさに「都市災害」であると言える。

新型コロナの世界的流行の終息が見えない今、鳥インフルエンザのため処分される鶏のように人間を殺処分するわけにもいかない。

首都圏は、岩手をモデルにすることに鍵がある。

岩手をモデルに都市の構造を見直し感染症対策するべきであろう。

東京と岩手の違いは何か？

東京は人口も建物も過密で、山林や緑地は少なく、岩手は緑が多く、人も建物は過密ではない。

東京は、戦後一貫して人口が集中し、高密度な都市空間を形成し、緑地や空地を削減してきた。

世界的に流行する感染症に対し、対抗できる岩手モデルの生活環境造りと都市改造が必要だ。

江戸の街を東京に改造した都市計画家・後藤新平の故郷、一関の閑静な街並みが思い出される。

首都圏に一極集中し過密化させる要素を東京から取り除く必要がある。かつて研究機能を筑波に移転したように、立法・行政機能を白河・那須高原に移転し、跡地をニューヨー



岩手県南部の中核都市、一関の街。江戸の街を改造した都市計画家・後藤新平の故郷

ク・セントラルパークを凌ぐ公園にすることだ。

感染症が拡大するたびに、自粛を要請し、協力助成金を振る舞い続けるより、東京の中心にある皇居の森や、司法の中心の最高裁判所は残し、国会や行政機関を移転し、緑豊かな都市公園を造り出せば、感染症に強い東京に再生する一歩となる。

「高層高密度化した建築群を削減し、緑と太陽あふれる健康な環境造り」これが新型コロナ感染を克服する目標である。

テレワークによりオフィスが空き始めている。幾つかのビルに分散していた本社や関連会社、系列子会社を一つのビルに統合する動きを耳にする。

オフィス街の賃料や地価が低下し始めている。都内商業地の中小商業ビルに波及し、業務スペースの空室が増加するだろう。この傾向を、緑と太陽あふれる健康な環境造りに転換できれば、コロナに強い東京に再生が可能となる。

ラッシュにたえて都市近郊に住んでいた勤労者の中には、テレワークで通勤から解放され、自然豊かで、感染症の恐れが少ないリゾート地に移住し始めている人も少なくない。

それだけでなく、高齢化社会の到来により都市近郊の住宅地では空き家や廃屋が急速に増加している。取分け東京・外周部の木造密集地域の廃屋を空地にし、緑と太陽あふれる健康な環境造りが東京の最大の課題である。

コロナ禍の先に、リニューアルの課題も多い。

まずは東京を中心とする高密度な都市を、分散型で適度なソーシャル・ディスタンスが取れた都市へ転換させる。

高層高密度化した建築群を削減し、健康な東京の環境造りが、大阪圏、名古屋圏、福岡、札幌などの日本列島の都市改造のモデルとしなければならない。

みき・てつ

㈲共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。

URD・建築再生総合設計協同組合・管理建築士。

建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、30年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたバイオニア。